
第二の人生はゲームらしいです～『イレギュラー』

紅優也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第二の人生はゲームらしいです〜『イレギュラー』

【Nコード】

N4657Z

【作者名】

紅優也

【あらすじ】

この作品はてんびん座様の『第二の人生はゲームらしいです〜』に私の作品のキャラをクロスさせた作品です。出来る限りてんびん座様の作風を壊さないように頑張りますので生暖かい目で見てください。

プロローグ（前書き）

始まりは怒りと交渉

プロローグ

世界の意味SIDE

『……また始めるか。』

『転生者ゲーム』。

神々の気紛れで決められた転生者による気紛れゲーム。

数年前『教授』こと『レン＝ベルツ』による神々に対する反乱を起こして以来第二の教授の出現を恐れて誰もやらなくなったが今回は凄まじ過ぎる教授の進撃に恐れをなした最高神が教授の進撃を止めようとしたが世界の崩壊を恐れていたために教授の口車にあっさり乗せられ再び始める事にしたらしい。

『再び俺が治める世界を戦場を選ぶとは良い度胸をしているな……レン＝ベルツ……』

俺はゆっくりと立ち上がり神界に俺を転送する。

「「ない。」」

「ほお、転生者ゲームをやるのか。」

そのゲーム、俺も混ぜてもらおう。」

俺の言葉に最高神の馬鹿共は絶句しレン＝ベルツは此方を振り向き

……

「誰だお前は？」
と、言った。

……

教授SIDE

「(……何だこいつは?)」

俺こと『レン＝ベルツ』は突如絶句した二人の最高神の視線の方向に振り向いたらそこには絶句している二人とは比べ物にならない程の威圧感を誇る男(と、言うよりは『漢』だな)が立っていた。

「誰だお前は？」

「俺か？」

俺はお前達が転生者ゲームを行う世界『魔法少女リリカルなのは』の全ての世界を治める『世界的意思』だ。

そこの馬鹿二人とは色々要因縁があつてな。

あと言葉に気を付ける若造。」

男『世界的意思』が溜め息を吐きながら俺に注意をする。

「はん！」

てめえなんざが出る幕じゃねえんだよ！死ね！」

言いながら俺の部下である『ライア＝ベルツ』が飛び掛かり……俺と俺やライアと一緒に来ていた部下の一人『ルナ＝ベルツ』の上をライアが飛び越えていった。

「………は？」

「ふん、貴様の部下は口は一人前だが腕は半人前以下だな。

俺の実力を見切れんとは。」

ポカーンとした表情で吹っ飛んでいったライアを見ていた俺とルナにパンパンと手に付いた埃を落しながら世界の意味が言った。

「一応言っておくが貴様等が俺の転生者ゲームへの参加を認めなかった場合は即座にお前達全員の転生者が俺の管理する世界に入れぬ様に『拒絶』をかけて戦い事態を成り立たなくさせてやる。」

ち、面倒くさい奴が介入してきたものだぜ。

「……………しょうがありませんね、許可します。」

「ち……………好きにすれば良いだろ。」

「ち……………戦い事態が成り立たなくなるよりは増した。参加しろよ。」

最高神達も俺も渋々ながら世界の意思の転生者ゲームへの参加を許可する。

「ふん、当然だ。」

ルールを決める際は俺も呼べよ。」

そう言って世界の意思は自身を転送していった。

「がああああああああああ！

あんの糞野郎が！絶対に『ギャフン』と言わせてやる！」

「そうですね〜〜あいつの泣きっ面を見てみたいものです。」

世界の意思が去るとライアは猛り狂いルナは冷たい殺気を発する。

「お前等『今は』落ち着け。」

俺は二人を宥めながら他の部下が入るところまで転送した。

続く

プロローグ（後書き）

如何でしたか？

次回は世界の意思の転生者が明らかになります。

次回『転生者は迷惑を掛けた奴』

お楽しみに！

第一話（前書き）

転生者は迷惑を掛けた奴

第一話

世界の意思SIDE

よう、世界の意思だ。

俺は今レン＝ベルツや馬鹿二人とルールについて決めてきた所だ。

因みにルールだ。

『転生者は同じ年齢とする。』

『転生者は無印、A、S、StSまでは最低でも辿らせる事。』

『転生者は殺さなくても降伏、若しくは勝手に死んでも敗北とする。転生者は降伏したら神と話したりした事や特典についての全ての記憶を失う。』

『転生者は現地では自身が転生者だと知られてはならない（知られた場合は降伏した場合と同じ罰を与えられる）。』

『転生者の肉体は死亡する直前若しくは直後とする。（なお、破った場合はその転生者を転生させた神は問答無用で敗北とする。）』

『転生者に対する特典は三つとする。
増やす事も減らす事も禁ずる。

（破った場合はその神は問答無用で敗北とする。）
が、ルールだ。

因みに（）内の言葉は全て俺が提案したルールで馬鹿共が承認した。レン＝ベルツの事だから下手をしたらルール無用のやり方をしかねんしな。

まあ……

「奴等が転生させる奴は分かり切ってるがな。」

レン「ベルツは恐らく奴が所有する天使共の内一人を転生者として登録するだろう。」

赤毛の最高神はそれを予測して絶対にレン「ベルツ」に対して恨みを持つもの……即ち前回の転生者ゲームでレン「ベルツ」にこてんぱんにやられた奴等の内一人を自身の転生者に仕立てあげるだろう。

金髪碧眼の最高神はその逆手を取り恐らく原作キャラの身内になりそうな奴を自身の転生者に仕立てあげ何もできないようにするに違いない。

「ふむ……」

予測出来たとしても俺がこのゲームについて素人なのは否めん。
誰を転生者にすべきか……ん？転生者？

「『目には目を歯には歯を魔導士には魔導士を転生者には転生者殺し』だ！」
奴を使おう！

……………

ゼロムSIDE

「つで、僕なんですか！」

「つで、お前なんだ。」

僕『ゼロム・グラシウム』は目の前でニコニコ笑っている人『世界的意思』を見ながら突っ込みを決めた。

いきなり『来い！』と言われてこの空間に連れ攫われてみれば『転生者ゲームに参加しろ！』と言われるし……はあ。

「まあ、僕に拒否権は無いんですけどね。」

「まあな。」

世界の意思は僕が『レイス・クロフォード』によつて『アスラクライン』の世界に吹き飛ばされた際に再びこの世界に帰れる様にしてくれた恩があるから断る訳にはいかないんだよね。

「で……望む特典は何だ？」

『特典』……第二の人生を生き残る為のキーカード……

「……皆の能力や魔法を『神の卵』ハンフティ・タンフティに登録しておいて下さい。」

一つ目は単純に僕のレアスキルの強化。

皆の能力があれば此方にぐっと有利になる。

「解った。二つ目は何だ？」

「二つ目は……八神部隊長の弟として転生させて下さい。」

『PT事件』から始めるのなら両方と戦いやすい人間の家に転生するのが利口な方法だろう。

「相変わらず頭良いなお前は。最後は何だ？」

「デバイスは最初から所持で『ゼロ』と『リイン』を使わせて下さい。」

今までずっと一緒に戦ってきた二人を今更使わないなんていう法律は無い。

「ま、妥当な願いだな。」

世界の意思はこほんと一息おいた後……

「適当に逝ってこい。」

え？字が違……

僕の意識はそこで途切れた。

続く

第一話（後書き）

如何でしたか？

次回はゼロムが負け犬剣士こと『河内亮』と最強転生者こと『高町星』に遭遇しますが戦闘はしません。

次回『温泉と予言とニュータイプ』

お楽しみに！

第二話（前書き）

温泉と右ストレートとニュータイプ

第二話

ゼロム
零SIDE

僕『ゼロム・グラシム』こと『八神零』は只今姉である『八神はやて』と一緒に温泉に来ておりました。

「零~~~~はよ温泉行こうや~~~~！」

八神部隊長もといはやて姉さんはこの頃って本当に純情なんだなあ
と僕の世界でのセクハラ部隊長の顔を思い浮かべながら思っていた。

「いや、幾ら何でも早すぎるよ……ちよつとは休ませてよ……」「問
答無用や！」いやあああああああああああああ！？」

訂正この強引な性格はやつぱり未来の八神部隊長に似通っている。

『マスター……心中お察します。』
ありがとうゼロ……

因みにリンやゼロは四歳の誕生日の時に父さんがくれたペンダ
ントがゼロだった。リンは元から傍にいますというおまけ付きである。

……

「はあ……もう良いよ解ったよ。
入るよ入るからこの手を離して。」

はやて姉さんに強引に温泉の暖簾の前まで連れてこられた僕は観念
して温泉に入る事にした。

「~~~~零は知らんやろ？」
？何を？

「十二歳までは混浴OKなんよ温泉って」
.....忘れてた！

「ほな、入りましょ」
「いやあああああああああああ！？」
僕ってやっぱり不幸体質だなあ.....

.....
「うつつ.....やっぱり女湯って恥ずかしいよう.....（焦）」
誰かが入ってきたら僕は『何で入ってるの！（怒）』とか言われて怒られるのでは無いかとヒヤヒヤしている。

「う~~~~ん！気持ち良いなあ~~~~！」
そんな僕の気も知らず強引に連れてきた姉は僕の非難の視線にも何処吹く風だった。

「もう.....出て男湯に入るよ。」
「あ.....もう.....もうちょい姉弟のスキンシップしようやん。」
「姉さんが強引に連れてきたくせに何を言うのさ。」
僕は脱衣場への扉を開け.....僕の視界一杯に飛び込んできたのは幼い頃の高町一等空尉と友人の『アリサ・バニングス』さんと『月村すずか』さんと『星』さんとそれから見知らぬ少年の裸体だった。

「あ.....」
しまった誰かが入ってくるのを完全に失念してた。

「き、キヤアあああああああああ！？」
ボカン！

僕は高町一等空尉の右ストレートを受け漫画の様に宙を舞った。
流石高町一等空尉……幼少とは言え良い拳をしています。
僕は温泉に思いっきり体を叩きつけられながらそう思った。

……

亮《負け犬》SIDE

「ご、ごめん！痛くない？」

「う、うん。（本当は頬が激しく痛いです……）」

「もう、慌てて出るからそうなるんやで？」

「いや、姉さんが強引に僕を連れてきた所為だと思うけど？」

俺『河内亮』は風呂から出ようとしてなのは達の裸体を見てしまった為になのはにぶん殴られて漫画の様に宙を舞った少年『八神零』にある疑いをかけていた。だってそうだろう？

はやてに弟なんていないしそもそもはやてとなのははこんな出会い方をしない。

そして……一番ム力つく事はなのはが頬を赤らめている事だ。

「（……さてよ？」

何でこいつは出会って間もないなのは達に打ち解けてるんだ？）」「
なのは達の話聞いていると何だか零はなのは達の好みや性格を把握している様に思える。
はやては姉だからってちゃんとした理由があるからまだ良いとして
なのは達はおかし過ぎる。

「（まさかこいつは……『教授』の……『ベルツ』側の転生者の仲間か！？）」

だとしたらなのは達に打ち解けているのは後に機動六課に入った際

に裏切りを行うのに絶好のポジションを得るためだと解釈できるし
なのは達にフラグを建てれば管理局を裏切らせるのも容易いからだ。

「（くそ！ふざけやがってその温和な顔の下にどんな狡猾な策を隠
してやがる！

なのは達は絶対に俺が守る！」

八神零……お前の化けの皮は絶対に剥いで切り刻んでやるぜ！

……

零SIDE

「（本当に便利だな『ニュータイプ』って。）」

僕は今転生者の一人である『河内亮』の心を覗いてみたんだけど（
僕に完璧な敵意を向けていたからだ）……疑われたもんだね。

「（『教授』、『ベルツ』。」

これはもう一人の転生者の所有神だと考えて良いな。）」

『高町星』さんも転生者だろうけど今は転生者四人が揃ってから行
動した方が良さだろう。

二人を此処で片付けても良いんだけど教授側の転生者が洒落になら
ない強さだったら大変だしその時の都合の良い生け贄みがわりがいらないとね。

「じゃ、姉さん僕は出るよ。」

「ん、ちゃんと体を良く拭くんやで？」

「解って……はれれれれれ……？」

温泉から出ようとしたら視界が揺れ倒れそうになる。あ、逆上せた
のか……

なのは（名前呼びを許可された）が僕を慌てて支えようとして……
僕が押し倒す形になり唇が重なった。

「あああああああああああああ！？」

零のファーストキスがああああああああ！？」

はやて姉さんの悲鳴を聴きながら僕の意識は途絶えた。（因みに僕は今六歳です。）

.....

目を覚ましたらなのはが顔を深紅に染めて隣に座っていた。

「え〜と.....何で？」

浴衣は此処の備え付けだろうし、布団がかけられているのは逆上せたからだろうけど.....

「何でなのはがいるの？」

「はあ.....貴方がなのはの唇に重ねちゃって気絶した後なのはも真っ赤になって気絶したんですよ。」

何時の間に来たのか星さんがそこにいた。

「え.....~~~~~！！！！／／／／」

思い出されるなのはの唇の柔らかさ、そして何故か高鳴る胸の鼓動。

「すいませんでしたあああああああ！」

で、土下座。

「「何で!?!」」

重なる二人の声（流石姉妹だね）。

「いや.....その.....六歳なのにファーストキスを奪っちゃったから.....」

僕は顔が赤くなるのを感じながら土下座の理由を述べる。

「????それがいけない事なの?」

「(……多分十五、六歳で転生しましたねこの子は。)」

なのは……君はファーストキスの意味を知らない。

それから星さん、それは自分が転生者って事をバラす様な考えですよ?

「そ、それは今は置いといて。

あ、あのね零君……その家に食べに来てくれない?」

なのはさん(僕の世界ね?)の実家は『翡翠屋』っていうケーキ屋を営んでいて(最初は僕も『ヨハネ』も『ペテロ』も『嘘だ』)。』
』と思つてたけど本当だった。(前世では良く利用していた。

「え?別に良いけど……」

「本当!?ありがとう!」

ニコニコと笑うなのはに何だか胸がドキドキする僕だった。

(「「「「やっぱりゼロム(君)って朴念人だな(だよな)。」「」」」
頭に現れた『織斑』さん、『吉井』さん、『衛宮』さんの三人は殴
り倒した。

にしても……なのはの家に رفتたその日に戦闘になるとはね……

続く

第二話（後書き）

如何でしたか？

因みにこの作品のヒロインはなのはです。

次回は零がルナに遭遇し三人と戦闘します（因みにその時亮をばこばこにします）。

次回『遭遇と忘れと本家との差』

お楽しみに！

第三話（前書き）

遭遇と忘れと本家との差
負け犬超アンチです！

第三話

零SIDE

僕は今なのはと星さんに連れられ姉さんと一緒に二人の家の『翠屋』
(ここら辺は世界の違いか?)に来ていた。

「はあ……」

「何や溜め息なんて幸せが逃げて行くで……?」

姉さん、貴方は此処にいる男子が僕だけだという事を気にしないからそう言える。

因みに河内亮は何か用事があるとかいつて帰った。

うっ……緊張するなあ……

考えている内になのはが扉を開けて僕らを招き入れる。

やれやれ……此処まで来たからには腹を括るしか無いよね!

……

ルナSIDE

今日は『ルナベルツ』です。

私は翠屋にシュークリームを食べに来た所です(因みに私が作ったのよりも美味しかったので軽い敗北感を味わいました)……て、誰に説明しているんでしょうか私は?

すると店に三人の女の子と一人の男の子が入ってきました。

二人は見覚えがあります。

高町なのはと八神はやて……あれ?

二人ってこの段階で知り合いでしたっけ……？

私はもう二人を見て危うく飲んでいたコーヒ―を吹き出す所でした。

「ん？ああ、なのはに星……友達か？」

何故カウンターにいる青年は八神はやてに似た少年に殺気を飛ばすんでしょうか？

「あ、うん。そうだよ。」

「や、『八神零』と申します宜しくお願いします。」

「八神はやて言います宜しくお願いします。」

星さんに零さん……星さんはなのはさんに似た容姿を持っています
が髪はショートカットです。

零さんは八神はやてに似た容姿を持っていますが此方は銀髪を背中
まで伸ばしているのでうっかりすると女の子にも見えてしまいます
(ここら辺には私は親近感を持てます)。

私はなのはさんもはやてさんも双子とは聞いていないので十中八九
転生者ですね……。

「(早速見付けました……)。」

『(どうします？今仕掛けますか？)』

と、私のデバイスである『アルテミス』が聞いてくる。

「(いえいえあの性悪の『世界の意思』とかが選んだりした転生者
ですよ?)」

そんなに簡単に上手く行くわけがありません。

……少し探りますか。

私は周囲に他の客がいるのを確認し……全力で殺気を出しました。

星さんは椅子をガタン！と言わせて立ち上がり……あれ？
零さんが立ち上がりませんね……？

因みになのはさんとはやてさんはきょとんとしていました。
それからカウンターの青年はキョロキョロと店内を見回していました。

何ですかこの店は？

超人喫茶か何かですか？

まあ、これで星さんの力量は解りました恐らく彼女は純粋な魔導士
か半人前でしょう。

零さんについては……今は保留にしておきましょう。

私は残ったコーヒーを飲み干し……その瞬間封鎖結界が発動しまし
た。

……

零SIDE

「（殺気……こつちが反応するかどうか見てるねあの人。）」

ベルツ側の転生者の人、甘いよ。

僕は『白獅子事件』の際にその手でシグナムさんにばれて戦闘を強
いられたんだからのるわけが無い。

だけど案の定と言うべきかわざるべきか……星さんは椅子をガタ
ン！と鳴らして立ち上がった。

因みに恭也さんは店内を見回した。

相変わらず武術の達人が多いよねなのはさんの家族って。

「（さてと……）」

僕は腰のポーチに手を入れてUSBメモリの様な物体……『ガイア
メモリ』の内『S』と書かれたメモリを取り出す。

そして封鎖結界が発動したので……

「（ごめん、皆。）」
『ストップ!!』

瞬間封鎖結界の中（因みに封鎖結界の中の人には解らない）と転生者以外は全て僕が使ったガイアメモリ……『停止の記憶』を持つ『ストップ』のメモリの効果により動きが止まる。

「ん？どうやら星さんと他一名は外に出たみたいだね。」
お金を置いていく辺りが律儀だ。

「さてと……『ライアーズマスク』。」
僕は神の卵に内蔵されている力を使い前世の顔にして八神零だとなれないようにする。

「さて……『ライガーゼロ・改』セツトアップ！武装は『イエーガー』！リイン、行くよ！ユニゾンイン！」

『了解です、マスター。』

『はいです!』

ゼロは『ペンダント』からリインは『僕の影』から答え僕の体に黒い外套とブースターが大量に着いているネイビーブルーの鎧が装備され更に装甲に銀色が追加される。

「さ……とと！」

『アクセル!!』

僕は『加速の記憶』を持つ『アクセル』メモリを使いイエーガーの最大加速を越えたスピードで二人を追い始めた。

……
僕が現場である『海浜公園』に来た時は既に戦いは始まっていたけど……

「貴方誰でしたっけ？」

ベルツ側の転生者が河内亮に首を傾げている場面に遭遇した。

「誰、だと……？」

「あ、すみせん……初対面の人には挨拶をしませんとね！
私の名前は『ルナ』ベルツ』です。」

ふむ……と、すると『教授』が敵の名前か。

「……テメエ、ふざけるな！！」

無理だよ河内亮。

踏まれた人間は忘れにくいけど踏んだ本人は忘れやすいんだよ。

最もルナ「ベルツは他人を戦車で踏み潰しても忘れてそうだけど。」

「まさか……本当に覚えて無いのか？」

「だから貴方とは初対面ですって。」

うん。完璧にルナ「ベルツは君の事を忘れてるね。」

「俺だ！俺！河内亮だ！」

「河内さんですか……誰でしたっけ……？」

本当に最低な人間ですね貴方は。

「ふ、ざけんな！」

力尽くで思い出させてやる！」

そして二人は剣を重ね合うけど河内亮もルナ「ベルツも中々の使い手だ織斑さんや衛宮さんと良い勝負をするかもしれない。」

だけど……

「そんな小さな腕や足で適うと思いますか……？」
リーチが違い過ぎる。

多分変身魔法を使って大人になってるんだろうけど先ず剣は腕が互角の場合は距離が勝敗を分ける。

あつさり河内亮が蹴り飛ばされそのままルナ＝ベルツが近寄り……
ん？手を翳して何をするつもりだ？

「食らいやがれ！『A I C』！」

……あ？

次の瞬間バインドも使われていないのにルナ＝ベルツの体が止められる。

……ふざけるなよ？

その力は『ラウラ』さんの象徴なんだ！お前が使っているいい力じゃないんだよ！

「やれ、星！」

「『プラストファイヤー』！！！」

な！？デバイス無しで砲撃！？どんなチートだよ！？

『リジエクシオン』

だけどルナ＝ベルツはシールドを斜めに展開する事であつさり防いだ。

そしてA I Cが凍り付き砕け散った。

「ふむ、中々の腕前ですがそれが本気なら興奮めです……」。

取り敢えず二人仲良くジ・エンドです。」

「誰が！」

君達と同じ転生者だ!!」

な、何だつて!?

八神零は転生者じゃないのか!?

「え!?!じゃあ八神零は何者ですか!?!」

ルナも驚いたらしく珍しくアイツが慌てていた。

「ふん、お前達が言うところの『オリキャラ』って存在じゃないかな?」

オリキャラ……そうか、俺やルナっていうイレギュラーが入るんだ。当然な答えかもしれない。

「待てよ……猿真似ってどういう意味だテメエ!」

「そのままの意味だ。」

お前がその能力を使う事は『IS』のキャラクターを侮辱しているのと同じ事だ。」

「テメエ……!」

舐めんなあああああああああ! 龍「はあ……こんな馬鹿に龍砲を使われる鈴さんも不幸だな。らあ!」ごふう!?

俺が龍砲を使おうとしたらゼロム・グラシウムが接近していた。

何……で?

「ふん、素早い相手には自らの動きを固定してしまう龍砲は不利なんだよ。」

使い手ならそれ位覚えとけ。」

「ぐ……舐めんな!」

『ブルーティアーズ』!」

俺はビットを出しゼロムに向かわせる『セシリア』との違いは俺も動ける事だぜ!

「馬鹿が。」

一瞬で四つのビットを全て爪で砕いたゼロムは神速でやってきて俺を蹴ろうとして……俺はA I Cを使い止める。

「……お前は多分噛ませ犬だな。」

何とA I Cを振り切りそのまま俺に蹴りを決めた。

「ふ……ふ……」

「……『セシリア』さんは動けなくてもビットの動きは複雑で精緻でそしてコンビネーションも抜群だった『ラウラ』さんは使われたら身動きすら取れなかった。

……お前は中途半端な猿真似なんだよ！」

猿真似……違う！

さっきまでは新しい力だったからだ！

最初から持っていた力は負けない！

「うおおおおおおおおおおお！『零落白夜』！！」

「……『輻射波動』。」

バリアなんか効くかよ！

ガギン！

「な………！あ………あ………」

「所詮は猿真似、出力最大とはいえまさか輻射波動で作ったバリアを切り裂けないとはね。」

俺の刃は……赤いバリアに一ミリもめり込んでいなかった。

「……失せろ。鳴り響け……終焉の笛！『ラグナロクブレイカー』」

！

俺ははやての必殺魔法を受け気絶した。

続く

第三話（後書き）

如何でしたか？

次回は戦闘はありません。

次回『原作開始まで残り一年』それぞれの光景』
お楽しみに！

第四話（前書き）

原作開始まで残り一年〱それぞれの光景〱

第四話

ゼロム
零SIDE

「PT事件まで残り一年か……」

僕ははやて姉さん（因みに足は一年前に悪くなってしまった……）が寝静まった隙を狙って無人の『管理外世界』に来ていた。

目的？ 闇の書を速く集めるための魔力を貯める為だよ？

下手に『闇の書事件』を長引かせたらなのはや星さんが危険だし（僕達転生者の魔法を吸収したらリンさんが手を付けられない強さになっちゃうからだ）織斑さん達の実力の猿真似野郎『河内亮』を『STS編』……まあつまり『機動六課』が編成された時に八つ裂きにするためだよ？

因みにあの後『ラグナロクブレイカー』で猿真似野郎を吹き飛ばしたけど殺す前に星さんが正確無比な砲撃を加えてきてさっさと撤退せざるおえなかった。

あ、『ストップメモリ』で止めた時間はちゃんと戻しといたよ？ それからなのは『何時でも遊びに来て良いよ！』って言ってたけど僕は餓えたライオン二匹（土郎さんと恭也さんね？）の『妹（娘）に手を出したら許さんぞ……？』という視線を毎回受けていたら本気で身が保たないと思う。

なので外堀（二人と仲良くなる事）を埋める事から始めている（でないところくに遊べないからね……）。

『マスター。』

河内亮のデータを集めました。』

序でに言つとさっきまで僕は猿真似野郎のデータに興味が出たので『時空管理局』のデータベースにハッキングを仕掛けいた。

「ふゝゝゝん……母親が『デバイスマイスター』で父親がこつちの人間だけど『魔力持ち』で『執務官』。

但し父親は既に殉職してるけど『リンディ』さん……というより『クライド』さんの知り合いだった……通りでデバイスを持ってる訳だ。

どうせ誕生日とかで母親にねだって作ってもらったんだろうけどね。

「……厄介な奴だよ。」

うかうかしてたらこっちは時空管理局全てを敵に回してしまう。

「はあ……昔は『アラン』さんに『秦』さんに『アルテマ』さん達がいたからどうにかなったけど……1人は辛いな……」

感情を捨てていた『白獅子』の頃ならこんな苦にならなかっただろうけどね……

「ま、どうにかなるさ。」

僕はかつて共に転生者達と戦った仲間達（とその恋人達）を思い浮かべながら立ち上がり家に帰る為に転送魔法を展開した。

……
ルナSIDE

「うゝゝゝむ……原作開始まで残り一年ですか……」

正直言つて面倒ですが……奴『ゼロム・グラシウム』はなんとかして倒さないと下手をすればこっちが撃破されかねません。

何故か私に凄く執着している河内さんを瞬殺した強さからして前世はベテランの戦士だったに違いありません。（注：ゼロムは元々優れた戦略眼や戦闘能力を有していたがそれが転生者達との死闘で一気に開花したためなのでベテランの戦士ではない。）

『で、どう動くのつもりですかマスター？』

アルテミスの問いに私は……

「取り敢えず先ずは一人でも減らします。

その後は……ま、どうにでもなるでしょう。」

最悪『ルル』と『ナナ』に出てもらうという手も無くはありません
が活躍させるのは『A's編』からですしね。

それに……

「ゼロム・グラシム……久々ですよこんなにぞくぞくする敵に相
対するのは……（にやり）」

あの性悪男『世界の意思』が選んだ転生者がどんな奴かと思ったら
……とんでもない奴で安心しました。

「くすくすくす……この戦い……楽しみが出来ましたね……」
私はゼロム・グラシムとは良いライバルになれそうだという確信
めいた笑いをしました。

……
星SIDE

私は今なのは達と一緒に温泉に来ていた。

因みに家族ぐるみなので『アリサ』や『すずか』、亮の家族も全員
来ている。（最も亮は親子二人暮しだけど……）

八神零は『姉さんの世話があるから行かない。』と言っていたが何
時の間に姉の八神はやてが仕込んだのかお茶に入っていた『睡眠薬』
でぐっすり寝込んだ所を私達が連れてきた（因みに八神はやては私
に『なのはちゃんと零の恋の懸け橋になろうや』と楽しそうな表
情で言った。）。

そして皆で温泉を堪能した後私達はこっそり宿を抜け出し川原に
来ていた。

今回の温泉は唯旅行をするための物では無く調査の意味合いもある。

「此処であっているのですか？」

「ああ、間違いない。」

此処で一年後に『ジュエルシード』が暴走する。

そしてなのはと『フエイト』が奪い合う。」

亮がはつきりと言った。

ゼロム・グラシウムに完膚なきまで叩き潰されて以来絶望に打ち拉がれていた彼ですが最近は何とか持ち直してきたみたいです。

「解りましたでは……時を……」「へえ、まだ生きてたんだ猿真似野郎。」！？」

驚いて振り向くとそこには亮を瞬殺し絶望に叩き落とした張本人ゼロム・グラシウムが立っていた。

「……何の用だ？」

「ああ、ちよつとしたご挨拶。

僕は無印とA'sでは君達に手を出すつもりは無いよ……StSでは遠慮も容赦も情けも一切無く粉碎するつもりだけど。」
ゼロムが亮の問いにさらりと答える。

「それから星さん。」

河内亮に恋心を持つなら今の内だよ？」

！？な、何故八神零にしか話していない事を知っているんですか！？

「簡単な事だよ？」

八神零に『ギアス』を掛けて聞いたんだ。」

「な、何て卑劣な！！！！／／／」

私は顔が暑くなるのを感じながら言いました。

「何だかヤバそうな空気が出てるんで……アディオス!!」

「二度と来るな!!! / / /」

私は即座に『アクセルシューター』を走り去っていくゼロム・グラシアムの背中に目掛けて撃ちますがあっさり防がれました。

ゴキブリみたいな逃げ足の速さですね……次にあつたら星屑にしてあげます!!

私は密かにそんな事を思いながら亮に対する思いもつのらせていつている事に気付いてすらいなかった。

続く

第四話（後書き）

如何でしたか？

次回はゼロムが前世でのもう一つのデバイスを手に入れます。

次回『永遠と再臨』

お楽しみに！

第五話（前書き）

永遠と再臨

第五話

ゼロム
零SIDE

「（今日からPT事件の始まりか……）」

僕はバスの車内で春の穏やかな日光を顔に受けて眠気を感じながら考えていた。

「（昨日になつて思い出したよ……僕が『八神零』としてPT事件に介入するにはもう一つデバイスが必要だつて事……）」

『八神零』が転生者では無いと言った以上ゼロを使ったら絶対に僕が『ゼロム・グラシラム』だと猿真似野郎やルナベルツに気付かれる。

「（はあ……良く考えたら何でガイアメモリはあるのに『リヴァイブ』は無いんだろう?）」

ガイアメモリは単体で使っても確かに強力だけど本来『ペテロ』が作ってくれたガイアメモリの能力を最大にまで引き上げる僕のもう一つのデバイスが無ければ下手をすれば暴走するのだ。

「（はあ……どうしたら良いんだろう……）」

「零君……一体どうしたの？」

さつきから難しい顔をして?」

「ふえあ!?!?!」

考え事をしていたらなのは顔が目の前に出て来たのでつい素っ頓狂な声を上げてしまった。

「えと……新しいクラスに馴染めるかどうか心配で……」

「そうなんだ……私も心配だけど零君と一緒になら何処でも良いよ

（につこり）「

「んな！？／＼／＼／」

なのはの最高の笑顔＋多分男が聞いたら自分に好意を持ってると思う言葉を言われて僕は顔が暑くなった。

「？何で零君の顔が赤くなるの？」

「なのは……………あんたといい零といい……………鈍感過ぎ……………」

アリサがなのはの肩をポンと叩きため息を吐く。

「本当ね。（なのは、もう零君に告白すれば？）」

「ふえ！？／＼／（無理だよ……………だって……………断られた事を考えたら……………怖いよ……………）」

すずかがなのはに何かをぼそりと告げるとなのはの顔が深紅に染まりあたふたと僕から離れていった。

「????なのはは一体どうしたんだろう?」

「（離して下さい亮！

あの鈍感を星屑にしないと気が済みません!）」

「（落ち着け星！

今此处で魔法を使うおうとするな!）」

因みに猿真似野郎と星さんは何でか猿真似野郎が星さんを羽交い締めにしていた。

「（ま、いつか。

……………デバイスの事本当にどうしよう……………!）」

僕は未だに残っている難問にまた頭を悩ませる羽目になった。

……………

「只今……。」

「零、お帰り……。」

僕は泊まりの準備をするために一度家に帰る事にした。（最も今のなのは達は『ユーノ』さんに会ってるんだろうけど……）

「でね姉さん……『お泊まり？別にええで？』って……僕の世話は
いらないうて事？」

昼休みが終わってからずっと気になっていた事だけど僕にとっては
ある意味都合が良い（何時でも好きな時に抜け出せるし猿真似達と
何時でも戦えるからだ。）けどね。

「……………」

あれ？黙り？

「（ぼそり）零は……頑張り過ぎやわ。」

「え？」

「だって……お父さんとお母さんが死んで私が足を悪くして以来零
はなのはちゃん達と全然遊ばないし私の世話の為に学校終わったら
さっさと帰ってくるし……たまには休むちゆう事をしてや？」

だから私は星ちゃんの提案をあっさり受け入れたんよ。」

「姉さん……………」

そっか……僕は……姉さんにそこまで愛されていたのか……

「ありがとう……姉さん。」

「どういたしましてや。」

それからお土産の『翠屋のケーキ』よろしゅうな？」

「絶対にそれも受け入れた要因の一つだよね！？」

というかそれがメインの様な気がするのはいのせい！？

……
はやてSIDE

「行つて来ますー!! (怒)」

「い、行つてらっしゃい……」。 (焦)」

私『八神はやて』はさっきの発言でがつつり怒った『八神零』がなのはちゃん家に行くのを見送った。

「あ、それから僕がいなかったら夜更かししちゃダメだよ?」
ち、鋭いわ。

「解つとるよ。」

零もなのはちゃんの家族に迷惑かけちゃダメやで?」

「解つてるよ。」

じゃあ今度こそ行つて来ます。」

「ん、今度こそ行つてらっしゃい。」

そう言つて零は出ていった。

「はあ……」

私は車椅子の背に体を預けつつ思う。

「(本当に零は罪作りやで……なのはちゃんみたいな綺麗な女の子好きにさせといて気付かないなんてな……)」

実の弟ながら姉の私がなんかなのはちゃんに申し訳ない気持ちになる。

「……零……幸せにな。」

私は絶対に治らないであろう足をしながらそう呟いた。

……

零SIDE

現在僕は『ジュエルシード』の暴走体になのは、星さん共々追い掛け回されていた。

え？話が飛び過ぎだつて？

しょうがないじゃん話す事があんまり無いんだから。

因みに何でこんな事になったかって言うと夜になのはと星さんの部屋で寝ていたらなのはが『フェレット（ユーノさん）さんが気になる。』と言って家を出て行ってユーノさんのいる動物病院に三人で来てみて見たのは見事に廃墟となった病院とそこに立つジュエルシードの暴走体だった。

「はあ……はあ……ごめん二人とも私が我が儘を言ったばかりに……」

なのはが息を切らせながら僕等に謝る。

「大丈夫だよ。」

勝手に着いてきただけだしこれはなのはの責任じゃないよ。」

「本当にそうですよ。」

僕も星さんも全力で走りながらなのはに……！？

「危ない！」

僕は慌ててなのはを突き飛ばし……

ドゴンー！

「が……あ……！」

僕はジュエルシードが振るった拳で漫画の様に宙を舞った。

「れ、零君!？」

嫌あああああああああああ!」

「八神零!」

二人の悲鳴が辺りに響き渡りジュエルシールドが二人に向けて拳を振るうけど猿真似野郎が寸でのところで銀色の盾で受け止めそのまま戦闘に入った。

「(畜生……!)」

僕が……ゼロを使えば……二人を守る力があれば!!

『マスターゼロム……いえマスター零、ライガーゼロだけしか頼らないとはどういう見ですか?』

え……?

そんな……まさか……

『ふ、マスター。』

お久しぶりです。』

「リヴァイブ……?」

僕は本来此処には無いはずのもう一つの相棒の名前を言う。

『イエス。』

……あはは……良かった。

「ぐ……!」

こいつも河内君と同じ……力なのかな?」

僕はリヴァイブを知っていると悟られないように芝居を打つ。

『メモリスロットに『永遠の記憶』を装填して下さい。』

僕はリヴァイブの基本形態である小手を装備しそこにある四つのスロットの一つに『永遠の記憶』を持つ『エターナルメモリ』を入れ

る。

『エターナル!!』

『永遠の記憶を確認。』

リヴァイブハートゲットレディ……セツトアップ!』

「行くぞおおおおおお!!」

僕はジュエルシードと猿真似野郎が戦闘している最中に突撃した。

「零君!良かった……」

「なのは……(撫で撫で)」

「て、二人とも!早く契約を進めてくれ!」

ユーノさんの声に二人は我に帰り契約の続きを始めた。

……

亮《負け犬》SIDE

「亮!」

俺が最初のジュエルシードと戦闘していると零が長剣を構えながら走ってきた。

何だあのデバイス!?

見た事無いぞ!?

そう形自体は大したことは無い。

問題はだ……ガイアメモリを接続しているデバイス何て見た事が無いだけだ。

「零!無事だったんだな!」

「まあね、にしてもデカイ……」

俺達はジュエルシードから振り下ろされる拳を回避しながら話合う。

「ごめん、二人とも待たせちゃったね！」

「行きますよ！」

星！なのは！契約が完了したんだな！

「（……よし）リヴァイブ、決めたいんだけどどうすれば良いの？」

『『射手の記憶』をそのままライフルに装填して下さい。』

そして零は小手から『トリガーメモリ』を出しライフルに装填する。

『トリガー！！マキシマムドライブ！！』

「『トリガーイクスバスター』！！」

ライフルの銃口が広がりそこから巨大な魔力砲撃が飛び出した。

そして……そのままなのはがジュエルシードを封印しその日の戦いは終結した。

第五話（後書き）

如何でしたか？

次回はゼロムとしてルナ、負け犬、星と海鳴温泉で戦闘します。

次回『獅子とチートと氷撃』

お楽しみに！

第六話（前書き）

獅子とチートと撤退

紅優也「な、ナナの口調が難しい……」

第六話

ゼロム
零SIDE

ピンポーン

「? 宅配便とか無い筈だけど……」

この世界のなのはとこの世界のフェイトさん（当たり前だけど……）僕の世界のフェイトさんよりは弱かった）との出会いとも言える戦いから数日たった休日に玄関のチャイムが鳴ったので僕は訝しみつつ扉を開ける。

ガチャ

「零君、一緒に温泉に行こう!」

「いきなり何!?!」

扉の前にいたなのはの突然の誘いに素早く突っ込みを入れてしまう僕だった。

「ちょっと、なのは。

いきなり言っても伝わる訳無いでしょ?」

と、すずか。

???? 一体どうしたんだ?

「今日は休みだからさ、皆で温泉に行こって事になってなののが『零君も誘お!』って言ったから来たんだ。」

と、猿真似野郎。

そうなんだ……

「だから姉さんの世話……」「零、温泉に行つて来なはれ。」「姉さん！？」

姉さんはまたも許可をあつさり出す。

「零。久々に温泉に普段私を世話してる疲れを癒してきなはれ。」

姉さんの麗しき家族愛に涙が止まらない。

「姉さん……解つたよ。」

準備してくるからちよつと待ってて。」

僕は温泉に必要な物を取ってくる為に自分の部屋に向かった。

………

「零君！温泉に入ろう！」

「この展開に何か即視感があるんだけど！？」

ついで猿真似野郎と同じ部屋に入つて数分後になのはがやってきて温泉に入ろうと言ってきたのに突っ込みを決めた。

「問答無用だよ！」

「にゃあああああああああああああ！？」

僕は初めてなのはにあった時の様になのはに強制的に連行されて行った。

………

ルナSIDE

「はあ~~~~。」

温泉は気持ち良いですね。」

流石は温泉。

日頃の疲れが癒えて行きます。

あ、こんにちはルナベルツです。

只今はフェイトやアルフ、ルルにナナと一緒に今夜発動するジュエルシードを確保するために海鳴温泉に来ておりました。

しかし温泉はバスルームや風呂とはまた違う感じがしますね。

「（ルルにナナ……そっちの湯加減はどうですか……？）」

私は隣に入る二人に念話で話し掛けます。

「（バッチリだよ……！）」

「（ル、ルルが泳ぐ、から、恥ずかしい。）」

あ……いますよねそんなガキが。

迷惑がかかるから止めましょうね？

『あ、零君がユーノ君を身代わりに逃げた！』

『（れ、零！？僕を見捨てないでくれ！）』

『（ごめん、ユーノ！』

今は尊い犠牲になってくれ！』

『（う、裏切り者おおおおおおお！！なのは！直ぐに零を追うんだ！）』

『勿論だよ！』

？向こうは一体どうしたのでしょうか？

ドカン！

「何でなのはまで男湯に入ってくるの！？」

「零君が逃げるからだよ！」

「（ふふふ、零！よくも見捨ててくれたね！）」

「（ユーノ！？君の助言か！？）」

私はいきなり温泉にどたばたと入ってきた三人に呆然としました。

何で……何で八神零が此処に！?!?

……………

零SIDE

「なのは待つて！何で僕を女湯に連れ込もうとするの！？」

「何でつて……零君と温泉に入る為だけど？」

いやそれは解るけど……

「僕は男湯に入るからね！？」

「ダ~~~~~メ！私と一緒に入って！（アリサちゃんは言ってた！
こういう時に二人の仲は進展するって！）」

あ、アリサさああああああああああああん！

あんた何て事を言ってくれるんだ！？

「く……！仕方ない！」

ガシイ！

「（！？れ、零！？何をするんだ！？）」

秘儀！変わり身の術！

「あ、零君がユーノ君を身代わりに逃げた！」

「（れ、零！？僕を見捨てないでくれ！）」

ユーノさんの念話の悲鳴を僕は……

「（ユーノ！今は尊い犠牲になつてくれ！）」

サムズアップしながら逃げる事に集中した。

「（う、裏切り者おおおおおおお！！なのは！直

ぐに零を追うんだ！」

「勿論だよ！」

なのはは直ぐに追ってきた。

大丈夫！男湯に入ってしまったえばこっちのものだ！

しかし……温泉は十二歳までは混浴可能だって事をまたもすっかり忘れていた僕は見事になのはも男湯の更衣室に入ってきたので手早く服を脱ぎ温泉に逃げ出す。

ドカン！

「何でなのはも男湯に入ってくるの！？」

「零君が逃げるからだよ！」

「（ふふふ、零！よくも見捨ててくれたね！）」

「（ユーノ！？君の助言か！？）」

そして……

ズリ……ゴツキン！

「……いったあああああああああああああああ！？」

「

僕は滑り前にいた銀髪の少年に思いつきり頭をぶつけそのまま意識を遠退かせた。

………

目を覚ましたら既に夜だった……ん？

温泉……夜……PT事件……あ！

「そつだ思い出した！」

今日はなのはとフェイトさんがジュエルシードを巡って戦つんだ！」
すっかり忘れてた！

絶対に猿真似野郎やルナ〓ベルツも来てる！

「『ゼロ』！行くぞ！」

『マスター、なのは様の増援に行つた方が良いのでは？』
う……そつだつた……

「あ、そつだ。」

僕はポーチから『E』と書かれたガイアメモリを取り出しリヴァイ
ブに装填する。

『イリユージョンマキシマムドライブ！』

その音声と共に等身大の鏡が出現しそこから『僕』がもう一人出て
来た。

これが『幻惑の記憶』を持つ『イリユージョンメモリ』の力。

イリユージョンメモリを使えば僕は幾らでもなのは達の増援や転生
者との戦いに行ける。

「リヴァイブ！」

ミラージュを頼んだよ！」

『解つてます！』

「うるさい！」

僕こそ失敗るなよ！」

「解つてるよ！」

ゼロ！セツトアップ！武装は『イエーガー』！」

『了解！』

僕はイエーガーの最高速度で猿真似野郎達の戦闘場所まで急行した。

.....

現場に辿り着くと既に戦闘が始まっていたので僕は上空からイエーガーの本来の姿『イエーガー・改^{スナイプ}』に変換すると上空から狙撃を開始した。

直ぐにばれるだろうけどやらないよりはましだろ。

「な！？狙撃！？何処から撃つてきやがる！？」

因みに猿真似野郎しか撃つてないからルナ「ベルツと星さんには一発も放っていない。

.....！来たか！

「ゼロム・グラシウム。

やはり貴方でしたか~~~~。」

『アイスダガー』

案の定ルナ「ベルツが飛行魔法を使いながら僕の所に氷で出来たダガーを大量に放ってきた。

「おっと、そんな簡単にやられたら話にならないからね！」

僕はダガーを躲しつつそのまま接近し『ストライクレーザークロウ』を叩き込む。

「む、中々やりますね。」

ルナはそれを剣で受け止めそのまま斬り掛かってくるけど僕はイエーガーの速度を最速にしそのまま背後に回る。

「んな！？速い！」

ルナが慌てて此方を振り向くけど.....遅い！

「『輻射波動刀』……斬！」

僕はゼロの固定武器の中で最大の威力を持つものを引き抜くとそのまま斬撃を赤い波動と共に飛ばし攻撃する。

「ですが……私も速いですよ……」
インヒューレントスキル
「IS発動……」
「ライドインパルス」！」

その言葉と共に輻射波動刀から発射された波動はルナが高速で移動した事であっさり避けられる。

「ライドインパルス！？

『トーレ』さんの能力じゃないか！？」

まさか他の『ナンバーズ』の人達的能力も……

「正解です……」
「スローターアームズ」！」

『マスター！後方三十度の角度から『ブーメランブレード』が！』

『セツテ』さんのISだあああああああ！？

僕は飛んできたブーメランブレードを何とか弾き飛ばしそのままスナイプの特征的武装『トルネディア』で狙撃する。

「い！？まさか弾き飛ばした瞬間に反撃とは……優秀ですね……」

「

「僕は余り魔法の才能が無いもんでね！」

だからこそ格闘術や射撃は極限まで鍛えたんだ簡単には負けない！

「テメエ等……！」

俺を……無視するなああああああああ……！」

「亮！熱くならないで下さい！！」

怒号が聞こえたので下を見ると猿真似野郎が剣を片手に此方に舞い上がってくるのと星さんが一足遅れて此方にやってくる場面だった。

「ち……またお前か猿真似。」

「本当ですね〜男と男の真剣勝負を邪魔するとは言語道断です〜
〜なので……ストーカー兼KYには此处でご退場願いましょう！」

「へ？」

「亮、後ろです。」

何時の間に設置したのか大量の氷で出来たダガーがありそれが一斉に爆発したが星さんに完璧に防がれた。

んな馬鹿な！？

星さんのバリアジャケットはとんでもなく重そうなんだけど！？

何だあの高機動は！？

「行きます。」

僕とルナの後ろにさっきの高機動で回り込まれ砲撃の構えを取る。
は、速い！？

「『プラストファイヤー』！！」

星さんのデバイスである『ルシフェリオン』に魔力がチャージ……
え？

「ゼロ、換装だ！『シユナイダー』！」

『り、了解！』

僕の体にネイビーブルーの鎧からゼロの格闘戦用の武装である『シユナイダー・改』^{バースト}のオレンジ色の鎧に変わり僕は即座に『Eシールド』^{エネルギー}を起動し何とかエネルギーを吸収しつつ体勢を整えて着地する。

因みにルナは何と『聖王の鎧』を発動しておりそれで地面に激突しても無事だった。

にしても……どんなチートだよ!?

エネルギーの充填から発射まで0.4秒しかかかってないぞ!?
猿真似啞然としてるし!

「最早貴方達に勝ち目はありません降伏してくれませんか?
貴方達程の騎士なら勝敗は見えていると思いますが……」
やべえ……

「そろそろフェイトは撤退……『メタルマキシマムドライブ!』
『メタルブラスト!』「きゃあああああああ!?!」あれく
くく!?!」

ルナが何か呟いていたけどそれはミラージュが『闘士の記憶』を持つ『メタルメモリ』のマキシマムドライブでぶっ飛ばしてきたフェイトさんを見て驚愕に変わった。

「零君、やり過ぎだよ!」

「ごめん、なのは!」

あれ? 詰んだ?

「……しろうがありませんねくく。(ゼロム・グラシウム、転移魔法は使えますか?)」

ルナが念話で僕に話し掛けてくる。

「(?!使えるけど……)」

僕は気絶しているフェイトを小脇に抱えながら答える。

「(じゃ大丈夫ですね。) 此処は……逃げるが勝ちです!
『アルテミス』!」

『アイスダガー』

即座に大量の氷のダガーを放ち……

「た~~~~まや~~~~!」

『エクスプロージョン』

全て爆破した。

「そついう事か! 転移!」

僕は温泉旅館に座標指定するとそのままルナ、ベルツやフェイト共々撤退した。

続く

第六話（後書き）

如何でしたか？

次回はゼロムがミラージュとんでもない策を作ります。

それからあの日記が……

次回『策と日記』

お楽しみに！

第七話（前書き）

策と日記

第七話

ゼロムSIDE

「う、うん……ん？」

此处は……温泉旅館か……」

しかもルナⅡベルツの泊まっている部屋だし……

結局昨日は気絶からの睡眠になったフェイトさんに抱き付かれていたために仕方なく僕はルナⅡベルツの部屋に泊まる事になったんだ。

「はあ……結局夜中考えても星さんの特典解らずじまいだなあ……」
フェイトさんの『真・ソニックフォーム』の高速移動となのはさんの『エクセリオンモード』の圧倒的な砲撃のチャージスピード……
これを両立出来る特典なんて見当たらない。

66

「一つ可能性はあるけどね……」

それはもう一人の『自分』を呼び出す事……つまり『イリュージョンメモリ』のマキシマムドライブと略同じ能力だ。

「うん……考えてても仕方がない。」

散歩に出るか。」

僕は腕に抱きついて寝ているフェイトをそつと退かすとそのまま外に歩きだした。

……

「はあ……！」

朝の空気は気持ち良いな……！」

僕は朝の新鮮な空気を胸一杯に吸い込みつつととと旅館近くの林道を歩いているとこだった。

「あ、僕。」

そういつて僕に近付いて来たのはミラージュだった。

「よう、ミラージュ。」

お前も散歩か？」

「うん、なのはが腕に抱きついて寝ていて眠れなかったから……」
……僕もフェイトのお陰で眠れませんでした。

「にしてもこれからどうする？」

「何を？」

「転生者ゲーム。」

このままだと星さんに圧倒されて終わるぞ。」

星さんの特典を理解していない以上このまま戦っていてもじり貧だ、
どうにかして特典を特定しないと次に戦った時にジ・エンドだ。

「うゝん……あ、そうだ。」

入れ替われれば良いんだ？」

????どういう意味だ？」

「つまりまた『八神零』に君が成って僕が『ゼロム・グラシウム』
に成れば良いんだよ。」

それなら僕が死んでも戦いは終わらないし奇襲だって思いのままだ
よ。」

成る程奇襲と言うのは常に敵の鼻先でかますのが一番効果的だから
な。

だけど……

「ごめん……また危険な事をさせて……」

『レイス・クロフォード』との戦いの時もミラージュが身を挺して僕を守ってくれたから逆転の糸口が掴めたんだ。

前回と言い今回と言い本当に迷惑ばかりかけてるな僕は。

「いやいや、寧ろ僕みたいな君の紛い物が何回も役に立てる事が光栄だよ。」

苦笑いしながらミラージュが励ます。

「……解ったよ。『ゼロ』。」

『了解しました。』

ミラージュ様は絶対に守ります。』

「おっけ。『リヴァイブ』。」

『任せて下さい。』

マスター零は守りぬきます。』

僕等は互いの相棒を交換する。

「行つてこい！『ゼロム・グラシウム』。」

「行つてこい！『八神零』。」

僕等はすれ違いに手を叩きあつた。

……

ゼロム《ミラージュ》SIDE

「……ゼロ……これは一体……」

『こ、このタイトルは理解に苦しみます……』

僕は今日の前にある『パンドラの箱』が信じられなかった。
だってタイトルが……

『お兄ちゃん観察日記』

《復興版》
だもん……

「あのさ……これ誰の？」

『知りませんが……取り敢えず失礼なのは覚悟して中を見てみたらどうかと……』

「う、うん……し、失礼……」

月 日

お兄ちゃん、五時に起床。

その後、ジャージに着替えた後、屋外にて剣の素振りをする。

今日着ているジャージは先週買ったもので生地の色が彼にとても良く似合う。

木剣を振るうたびに飛び散る汗が神々しくもあり、彼がどれ程美しいかが理解できる。

取り敢えずこれは写真として記録しブログにアップしておこう全世界にいる私の同士の為に………』

「待ってええええええええええ！！！」

いきなりプライバシーの侵害内容！？

肖像権とか君の中で何処に行ったの!？」

『しかも、お兄ちゃん、私のもの、私のもの』
『ってヤンデレ風味に書いてあるんですが……』

「もうやだこの日記！」

「ページ目からこんなに萎える日記って何!？」

「ま、マスター！」

つ、次のページを見ましょう！

もしかしたらまともになっているかもしれない！」

と、ゼロの言葉に僕は取り敢えず落ち着き二ページをめくる。

×月 日

お兄ちゃんが昼寝をしている。

彼はあの愛くるしい容姿に反して絶大な戦闘能力を誇っている。寝ていても迂闊に近寄っては気付かれる。

なので家にあつた睡眠薬で無理矢理眠ってもらった。

これで彼はしばらく目を覚まさない。何をしても。試しに頬をつついてみたら可愛らしい寝息以外何も反応が無い。

これで寝顔を撮る以外に……」

「うわあああああああああ!?!?!?」 「バン!」

『マスター! しっかりして下さい!』

取り乱さないで!』

ダメだもうこいつ末期だ!

ヤンデレの末期症状が発症してる!

「もうやだもうお仕舞いだよ!

このままじゃ僕の精神と魂が保たない!」

多分次を見たら魂が消し飛ぶ程の絶叫を発するだろう。

『マスター…… 此処は押さえてお終いまで見ましょう。

こうなりや自棄です!』

うん…… そうだね……

「すつ~~~~はあ~~~~…… は!」

僕は気合いと願いを込めて再び日記を開いた。

『 月 日

今日は私の誕生日だ。

家族皆が祝ってくれて私にプレゼントをくれた。

お兄ちゃんへアゴムをくれた。

炎の様な飾りがありお兄ちゃんの手作りらしい。

このへアゴムは私の一生の宝物にしようと決めた。』

「おお…… 凄いまともだ……」

しかもルナ＝ベルツは意外にも妹思いらしいね。

『良かったですねマスター。』

僕はゼロの言葉で安心しながら続きを見る。

『夜、誕生日だから二人きりで寝させて欲しいと言ったらOKしてくれた。』

お兄ちゃんの部屋は良い香がする。

これがお兄ちゃんの部屋の匂いかあ……

記憶に刻むのはもちろん、全身に循環させる様に深呼吸を……』

安心が吹き飛んだ。

『マスター！？』

一瞬ですが貴方の生命活動が全て消え去りましたよ！？』

僕はゆつくりとゼロに日記の変態チックになっている部分を見せる。

『……今、一瞬ですが人格形成の部分に重大な損失を受けました。』

「だよね……」

もう此処まで来たら見るしか無い！

「南無三！」

僕は日記の続きを見る。

『深夜、彼はぐっすり眠っている。』

当然だ。例の睡眠薬を彼が飲んだホットミルクの中に混入した。

これで何をしてでも大丈夫だ。

普段は一緒に寝たがるナナが入るが彼女は今フェイトお姉ちゃんと一緒に寝ている……』

……この文章を見る限り敵《ルナ＝ベルツ》はPT事件ではフェイトさん側で戦うつもりだね。

これが解っただけでも良いでしょう。

僕は最後の力を振り絞って日記を見る。

「……つまり、これから周囲の気にする必要が無いので好きな事が出来る。」

その時に服なんて邪魔な布は必要無いよね？

私はお兄ちゃんの寝巻に手を掛け……………」

「もう……無理
いいいいいいいい
いいいい！！！」

僕は周囲に憚る事なく全力で絶叫した。

.....

第三者SIDE

余談である。

ゼロムの絶叫で目を覚ましたルナとフェイトはルルの作った復興版の観察日記を見てフェイトは絶句しルナはルルの執念深さに驚愕しゼロムは魂が抜けていた。

当然ルルは二人にガツンと怒られゼロムはフェイトたつての頼みに
よりルナ達が住んでいるマンションに運ばれた。

続
く

第七話（後書き）

如何でしたか？

次回はゼロムがフェイト及びルナと共同戦線を築きます。

次回『提携と共同戦線』

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4657z/>

第二の人生はゲームらしいです～『イレギュラー』

2011年12月21日18時45分発行